

編集後記

この度、臨床神経学の編集委員に加えていただきました。よろしくお願いたします。私は主に運動障害学の分野で長い間、様々な Journal の査読を経験してきました。査読の難しさは自らも論文執筆をする立場であり、「人に厳しく、自分に甘く」はどうしてもできないという点だと思います。査読者の立場からは「研究の目的、必要性」が明確であるか、過去の論文を読破したうえで「既存の研究と何が違うのか」「何が新しいの？」が的確に述べられているかを重要視します。この部分が明確に記述されていることがすべての基本であります。自分を振り替えると実は一番苦手な部分であります。論文によっては自分の思い込みが強すぎて、引用論文を都合よく並べて、自分の主張を固めていく場合もあります。論文はあくまでも科学的中立性が重視されますので、これらの手口が見え隠れする論文はほとんど採用されません。査読でこのような論文を見ると、自分が行ってきたことがデジャヴのように甦ってきつてつい恥ずかしくなってしまう。また人を納得させるためには創造的推論とそのための検証のバランスが大切ですが、大胆な仮説、断定的な言い回しが、結果の重みに比してより目立つと、査読者は怒りの感情を抑えきれません。やや控えめな考察をするくらいが論文の価値より高められるのかもしれませんが、しかし自分を振り返ると論理矛盾を

突かれて撃沈することが多かったように思います。神経学の雑誌である以上、神経症候や用語の概念は正確でなければなりません。同じことを表現するのに複数の言い回しがあると、読み手にうまく伝わらず読みやすさに欠けます。また最も大切なことは日本語（英語）として正しく、美しく、しかも簡潔な文章であることです。しかし理想とは裏腹に不必要に長く、迂遠な表現、くどく脈絡のない文章にも遭遇します。ああ何ということだ、私もこんな文章を権威ある査読者先生方の貴重な時間を割いて読ませていたのか、とまたも反省してしまいます。でも出発は皆こんなものです。クリニカルクエスチョンを大切に、各自が見出した事実や結果を神経内科医に共有するための雑誌が「臨床神経学」だと思います。だいぶ昔ですが私の博士論文もこの雑誌に掲載していただきました。日常の忙しい臨床は一方で神経学においては宝箱のようなものです。そこに遭遇したあなたはそれを世に知らしめる責任と義務があると感じてください。論文作成、投稿、査読とのステップを通じて、自身の知識と経験がより確信につながる良い機会にもなります。まずは臨床神経学でその力を試してみてください。

(坪井義夫)

〈編集委員〉

編集委員長 鈴木 則宏 編集副委員長 河村 満
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡
 瀧山 嘉久 坪井 義夫 西野 一三 野村 恭一 星野 晴彦
 編集委員(幹事兼任) 園生 雅弘 高尾 昌樹

「臨床神経学」 第57巻 第3号 平成29年3月1日発行
 編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会
 発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 高橋 良輔
 印刷所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>